

2018 年 2 月 5 日

ジオパーク下仁田協議会
会 長 原 秀 男 様

日本ジオパーク委員会
委員長 尾池 和夫



第 32 回日本ジオパーク委員会審査結果報告書

2017 年 12 月 22 日に行われた第 32 回日本ジオパーク委員会において、貴地域は日本ジオパークに再認定されました。その審議の過程での貴地域に対する委員会からの意見をまとめて、ここに報告いたします。

【総評】

下仁田ジオパークは、2011 年に日本ジオパークの認定を受けたのち、2015 年の再審査において条件付再認定となった。条件付の理由として、ジオパーク活動の根本ともいえる、地域の自然資源の評価とその保全方法の検討や、下仁田ジオパークのステークホルダーとの関係性の構築、ガバナンスのあり方、さらにはこの地域の目指す方向の検討など、活動の根幹に関わる部分について組織体として主体的に議論を積み上げていない現状が挙げられた。これらについて、改善が図られたか、もしくは改善に向けた方向性が示されているかなどを、今回審査において確認作業を行った。

現地審査の結果、組織体制の改善がなされ、ジオパークと下仁田町自然史館及び下仁田自然学校との連携体制が確立されるとともに、地域住民が参加するボトムアップ的な運営が行われ始めている。また、運営計画も策定され、地質遺産の再評価と保全方法の検討も行われている。ただし、ジオパークを運営する体制のさらなる強化、運営計画の目標の明確化が求められるとともに、跡倉クリッペなど地域の地質遺産の地球科学的意義を広い視野をもってさらに整理し、地域の各種自然・文化遺産を合わせて、わかりやすく面白いストーリーを提供することも急務である。

以上のことから、全体としては課題とされていた項目について多くの改善がみられ、ボトムアップ型の推進体制が図られており、ジオパークとして再出発する体制が整ったと判断し、日本ジオパークとして再認定する。

【優れている点】

○ジオパークの運営を主体的に支えている「日本ジオパーク下仁田応援団」（2014 年設立）は様々な地域住民（134 名）によって構成されており、協議会の部会を通じてジオパークの運営計画や活動に、応援団というよりも主役として積極的に参加している。応援団の提案によって下仁田町の条例として毎月 20 日が「ジオの日」と制定され、毎月 20 日にジオサイトの清掃活動が行われているなど、その功績は大きいため、今後も引き続き主役としての活動を期待したい。

○下仁田ジオパークにおける地質だけではなく、自然、文化、無形遺産などについて、ジオパークの地域資源を活用した学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）が体系的に構築され実施されている。また、ジオパークを活用した教育旅行の誘致にも積極的に取り組んでいる。

○JGN 全国大会や全国研修会に積極的に参加するとともに、近隣ジオパークとの交流事業も行って

いる。また、日本地質学会などの関係団体におけるジオパークの発表など JGN 活動の認知度向上にも貢献している。

今後は、JGN 内において当ジオパークの活動実績を共有するとともに、「他ユネスコプログラムとジオパークの連携」や「学校教育におけるジオパークの活用」などの新たなワーキンググループの先導役としてネットワークへの貢献を期待したい。

【今後の課題、改善すべき点】

1. 緊急に解決すべき課題（おおむね 1 年以内）

○パートナーシップについて

ジオパーク活動を推進する協議会会員は、ジオパーク活動に取り組むメリットを理解し、実際にジオパーク活動に参画する意思のある団体または個人とすべきであり、協議会規約に基づいた協定書を締結する必要がある。

○アクションプランの具体的な数値目標の設定

ジオパークの運営計画であるアクションプラン（2017 年度～2021 年度版）において、ジオパークによる地域活性化に向けての総合的な計画が策定されているが、具体的な数値目標や年度毎の達成目標値が設定されておらず、今のままでは実効性にやや疑問がある。協議会でのさらなる議論を重ね、具体的な数値目標を設定するとともに「いつ、誰が、何をするのか」までの詳細な計画を策定することが必要である。

また、計画の策定に際しては SDGs の観点を盛り込み、持続可能な開発に向かった計画としてもらいたい。

○ジオパークの境界線について

地域住民および来訪者に対してジオパークの範囲を明確に示す必要がある。日本ジオパークの申請書も含め、協議会が発行するリーフレット、マップ、看板等にジオパークの範囲を表示してもらいたい。

○ジオパークの可視性について

看板、チラシなどにジオパークないし協議会の名称を表示し、下仁田ジオパークとして統一した可視化が必要である。また、外国人の受け入れを考えるならば、世界遺産に登録されている「荒船風穴」は当然のことながら、ジオパークの解説看板の外国語対応が必要である。

2. できるだけ早く解決すべき課題（おおむね 2 年以内）

○ジオツーリズムについて

下仁田ジオパークの地質と日本列島の成り立ち、ダイナミックな地球の活動との関わりを取り入れた、わかりやすく面白いストーリーでの解説が必要である。また、植物を中心とする生物などの地域資源も取り入れ、それぞれのサイトにおいても、「大地の成り立ち」「生態系」「人の営み」の関係性がひも解けるような工夫が必要であり、そうした内容を語れるガイドの養成講座を実施する必要がある。

ジオツーリズムを通じた経済活動を活発化するために、地域経済の活性化をプロデュースできる

人材をジオパーク活動にもっと引き込んでもらいたい。

○施設・インフラ整備について

ジオツーリズムの戦略を検討する上でも、計画的な施設・インフラ整備を行う必要があることから、総合案内看板、誘導看板、ジオサイトの解説看板の設置も含めた全体計画図と工程表の作成が必要である。

また、上信電鉄車内の掲示については、駅の近くで見られるジオサイトの紹介など、電車で来る観光客のニーズに合わせた工夫が必要である。

○地質資源以外の地域資源の活用について

各種自然遺産、文化遺産など、地域資源の再調査を行い、ジオパークとしてどのように活用が可能か再度検討する必要がある。特に植物を中心とした生物多様性や考古学資料など、地質地形との関連を明確にした上で積極的にジオパークに活用することが重要である。

3. 解決すべき課題（3, 4 年先を視野に）

○地質遺産の地球科学的意義の整理について

下仁田の人々にとって「跡倉クリッペ」がとても大切なもので重要な存在であるとしても、その意味をきちんと語らずに「跡倉クリッペ」を強調するだけでは何が面白いのか、何が大切なのかが他の人々には伝わらない。学術部会が中心となって、跡倉クリッペそのものに関する研究だけではなく日本列島の地質構造発達史に関する研究も整理した上で、跡倉クリッペと日本列島の成り立ちの関係について再度検討と整理を行う必要がある。そのためには学術部会が様々な分野の研究者との協力関係を築いて、広い視野でストーリーを構築する必要がある。以上のようなことを実現するために、学術奨励金制度および自然史館研究報告のより一層の活用を期待したい。

下仁田にあるものを学ぶだけでは下仁田の地形・地質がどうやってできたかは語れないので、ガイドが他のジオパークに行ってみ聞を広げることも重要である。

○情報発信、教育活動について

・看板、パンフレット、リーフレットについて

協議会で作成している看板、パンフレット、リーフレットについては分かり易い内容となっているが、その場所にあるものだけの説明となっており、日本列島の成り立ちやダイナミックな地球の活動との関係性がわからない。日本列島の成り立ち、あるいはプレートの沈み込み帯での出来事などと関連づけた内容とする必要がある。

・下仁田町自然史館の展示について

ジオパークの拠点として重要な役割を果たす下仁田町自然史館の展示は、子どもの興味を引く工夫がされているが、地質に関する展示は専門的なものが多く、ジオパークが想定していると思われる客層とはかなり異なるターゲットに向けたものとなっている。ジオパークにおける下仁田町自然史館の使い方を再度検討し、それに合わせた展示とする必要がある。

・下仁田町歴史館の展示について

下仁田の歴史に触れられ荒船風穴への導入としても重要な場所であるが、全体としていきなり細部から見せる展示・解説が多いので、時代背景との位置付けなど全体的な概要を踏まえての展示・

解説とする必要がある。

- ・教育活動について

ジオパークの地域資源を活用した学校教育プログラム（下仁田学習の手引き）に、今後 ESD や SDGs の観点を取り入れてもらいたい。風穴、鉱山遺構は、人が自然を活用してどうやって持続可能に経済活動を続けていくか、ということを学ぶ良い教材になりうる。

以上、指摘した点や現地審査で指摘された問題点も含め、今後どのように改善するかについて、予算の裏付けとスケジュールを明記したアクションプランの形で、今年度中に日本ジオパーク委員会に報告してください。このアクションプランの進捗については 4 年後の再審査の際の審査対象とします。

以上